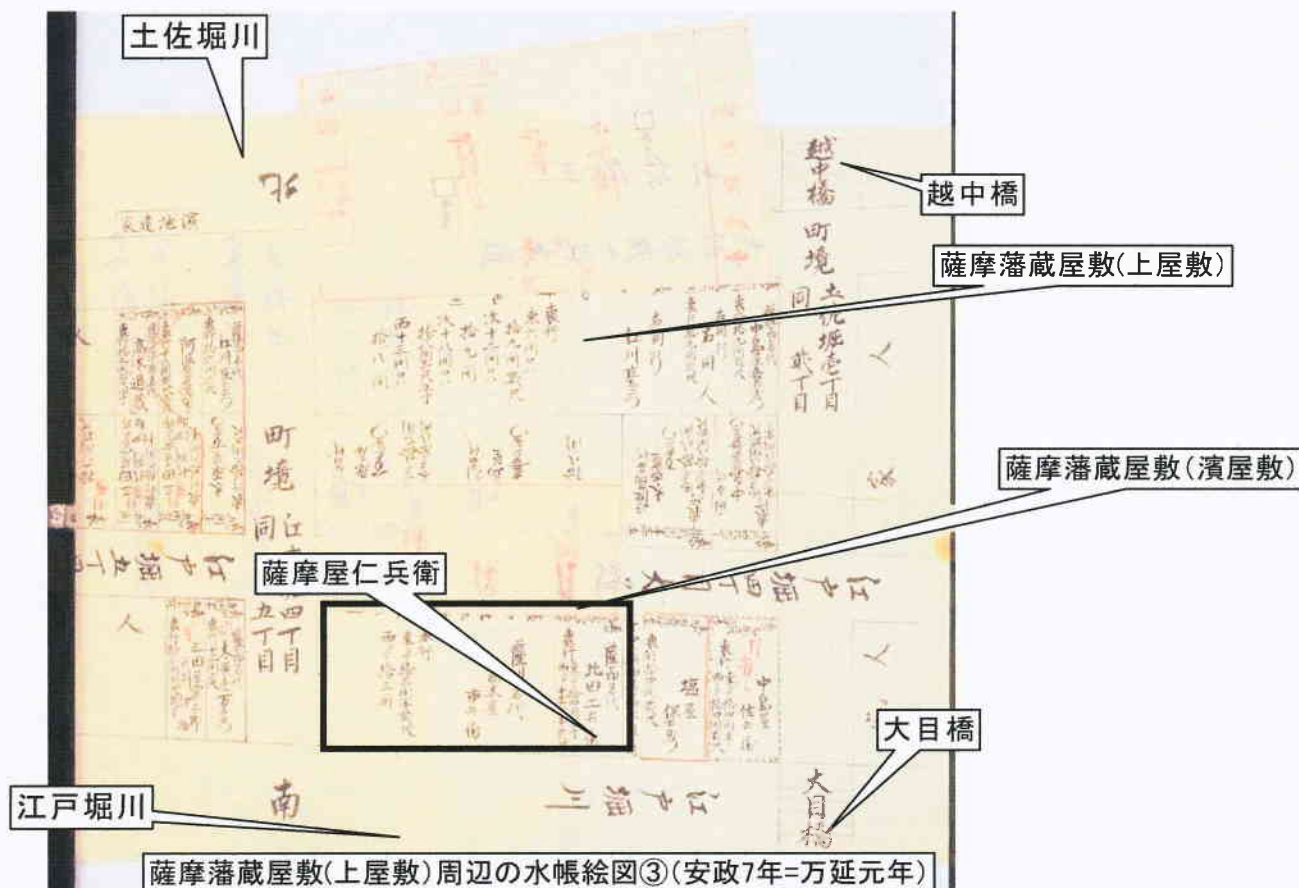


2 薩摩藩蔵屋敷(濱屋敷)跡

西区土佐堀2-7-27付近

- ▶ 下記の水帳絵図に薩摩藩蔵屋敷(上屋敷)の南に薩摩藩濱屋敷なるものがあったことがわかります。
しかしながら、そのほかの史料では、現段階において「薩摩藩濱屋敷」について記載が確認ができないため、存在した事実のみをお伝えし、今後の研究課題にしたいと思います。



3 薩摩屋半兵衛ゆかりの地 大目橋(だいもくばし)跡

西区江戸堀2-7-5付近

- ▶ 大坂には人工で作られた川がたくさんあり、江戸堀川もそのうちのひとつでした。
元和3年(1617)に完成し、昭和30年9月に埋め立てられました。
長さ約1270m、幅は上流で約23.5m、下流で約32.6mの運河で、東から西へ撞木橋・江戸橋・犬齋橋・阿波殿橋・大目橋・花乃井橋・江戸堀橋・西北橋・崎吉橋の9橋が架かっていました。
江戸堀川は、川端頼長、桔梗屋五郎右衛門、紀伊国屋藤左衛門らが共同で開削しました。
川端家第11代当主である川端頼長は、その功績により「惣年寄」に任命されました。
そして川端家のみで大目橋(題目橋)を架橋します。
川端家(後の薩摩屋半兵衛)は、法華経の信者であったことから「題目橋」と名付けられました。
後に字が変わり、「おおめばし」と読まれるようになったといえます。(別の説もあり)



第23代薩摩屋半兵衛(川端廣長)



歴代の薩摩屋半兵衛(川端家)墓所/法性寺



この電柱より北側が現在の土佐堀通り



南から北を望む「大目橋」の古写真

大目橋北詰右側(東側)から、3本目の電柱より北側に、市電の新設のため道路が拡張し、現在の土佐堀通りが作られています。この道は「越中橋」まで続いています。



大目橋跡

薩摩屋半兵衛

薩摩屋半兵衛は、源氏の子孫にあたります。平安時代末期、源頼政が宇治の戦に敗れ、後裔の親綱が京都嵯峨にある川端に隠れ住んだことから、その後、川端姓を名乗ります。

元和3年(1617)、川端頼長(川端家第11代当主)は桔梗屋五郎右衛門、紀伊国屋藤左衛門らと共同し、江戸堀川を開削しました。その功績により、川端頼長は惣年寄(大坂町人有力者で構成されていて約10人で合議する役人のような役割)に任命されました。第12代川端頼直、第13代頼賢の頃から、薩摩藩との関わりができ、正徳元年(1711)、川端家第15代直英の時、薩摩の国産品である黒砂糖を専売の権利を得ました。そのとき、川端家は惣年寄から外され、薩摩屋仁兵衛(比田家)に惣年寄を命ぜられ、両家は永年不和が続いたといわれます。第15代川端直英は、薩摩藩より黒砂糖取扱いの権利と、「薩」の字を家印とし、以来「薩摩屋」と称することが許されます。「薩摩屋」という屋号を持った商人は十数軒ありました。第16代川端英氏(薩摩屋半兵衛)は、延享2年(1745)、薩摩藩より黒砂糖に加えて菜種子、椎茸、鯉節など取扱いを命じられます。また長州藩、土佐藩にも出入りが許されます。その川端家23代目にあたる薩摩屋半兵衛(川端廣長)は、大坂で父祖の家業を継ぎ、薩摩藩出入り御用商人として、薩摩の産物(砂糖、煙草など)を取扱い、薩摩藩邸(江戸堀の屋敷と書かれていることから薩摩藩蔵屋敷の中屋敷と思われる)の鍵保管役を務めました。半兵衛廣長は長崎との商取引をする中で、蘭語習得の必要性を感じ勉強しました。

24代目半兵衛直廉も父の影響を大いに受け、父子ともに緒方洪庵の「適塾」に通い勉強しました。この薩摩屋23代目半兵衛廣長は、勤王の志士を援助し、邸内に匿ったりもしました。

坂本龍馬を匿ったという説が残っています。廣長は、会津藩士に斬られ重傷を負っています。薩摩屋24代目半兵衛直廉は、鳥羽伏見の合戦の際、薩摩藩の軍費を整え、貢献しています。ボードウィンと川端家は、蘭語の習得の際、適塾を開塾した緒方洪庵を通じて親くなりました。浪華仮病院の教師として招聘された蘭医ボードウインの寓居先に、自身の菩提寺である法性寺を推挙します。当時の住職竜見日定師は、ボードウインを喜んで受け入れます。廣長は明治4年(1871)に55歳で、直廉は大正3年(1914)に75歳で他界しています。
※情報提供: 薩摩屋半兵衛のご子孫である川端直正氏

4 勝海舟寓居(順正寺)跡周辺

福島区野田1周辺

- ▶ 文久2年(1862)閏8月17日、軍艦奉行並に就任した勝海舟は、同年12月、軍艦順動丸で大坂天保山に投錨し来坂しました。その後、大坂を基盤に兵庫、泉州、紀州などを訪れ、砲台の設置場所を吟味しています。「海舟日記」によりますと、

文久3年2月27日に『朝、上陸。安治川一丁目順正寺旅館に到る。(以下省略)』

と記されており、「順正寺」を大坂の寓居先にしていました。順正寺は、現在の大阪市福島区野田1丁目、中央卸売市場のあたりにありました。

勝海舟の日記には誤記がよくありますが、「順正寺」は実際に存在していました。

「慶応四年目録(川口居留地開設直後の外国人との対応や外国事務局の動静を記す資料)に」次のとおり記されています。

『(慶応4年)九月二日 亥 晴 (途中省略)安治川上壱丁目 順正寺へ丸亀人数旅宿申付置候処、(以下省略)』



勝海舟

「順正寺」はその後、大阪市西区京町堀、さらに東淀川区へと移転し、昭和34年廃寺になりました。



「大阪税関」跡から見た安治川と勝海舟の寓居「順正寺」跡周辺

今回は2009年3月29日(大阪史跡探訪Vol.8)にご案内済みの、新しく判明した史跡および紹介漏れの史跡をご紹介します。次回も引き続きこの内容を連載いたします。どうぞご期待ください。